

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年6月1日発行 第21号

今年の学校建設はパラグアイ、チャマコ地方
インディヒナのカトーセ、デマジョ村
(チャマココ族)に決定



パラス校長

カトーセ デマジョ村視察報告書(佐野パラグアイ事務局長)
この村は人口が百人程度の小さなインディヘナ(チャマココ族)の集落である。レダ基地からパラグアイ川上流に向かって約三十五kmの所にある。この地の人たちの生計を立てるための中心的な経済活動は養蜂、漁業、民芸品製作販売であるようだ。しかしどれをとっても大した収入はなさそうだ。ただ、この村は政府から約一万ヘクタールの土地を与えられている。農業はと聞いてみると僅かにオレンジとグレープフルーツの木を持っているのみとの事である。この点については、この辺の人たちは農耕民族ではなく、狩猟民族であるが故に仕方が無いのかもしれないけれど、そうであるならどうしてここに一頭の牛もいないのか疑問に思ってしまう。この人たちはどのようにして生活しているのだろうかと非常に不思議に感じる。ともかく著しく貧しい生活を送っているという事は間違いないさそうである。学校は一年生から四年生まで現在三十五人の生徒がいる。一年生が十人、二年生が十人、三年生が五人、四年生が十人である。それ以上勉強を続けたい人はこの村を離れて上級の学校を持つ町に行かねばならない。この学校は正式名をESCUELA DE KARCHA GAHLUT(大きなカタツムリの学校)というそうである。KARCHA GAHLUTはチャマココ語で大きなカタツムリという意味らしい。教室はヤシの木で造った六m×10mぐらいの粗末な部屋が一つあるのみ。この教室もスペイン系の環境保護団体ASOCIACION・HOMBRE Y NATURALEZA PARAGUAY(人間と自然協会)とAMIGO DE DONANA ESPANAという団体が寄贈したものである。一つの教室で午前と午後に分けて二人の先生が一学年ずつを教えるのである。日本では考えられないような状況下で彼らは勉学を強いられている。ここを訪れた時、ちょうど五月十四日でパラグアイ独立記念日。村人総出で港の近くの草を刈っていた。それ故、村長さん、副村長さん、先生二人(内一人が校長先生)を始め、村人全員で迎えてくれた。彼ら自身何の経済的力も持たないが故に、今回我々が学校を建設するニュースは彼らにとってこのうえない朗報で、とても期待しているようであった。村長、副村長、校長先生らこの村の幹部総出の案内で学校の内部や学生達が宿泊する建物を見せてもらった。ノートも鉛筆も無いんですと訴える校長先生や他の村と交信する手段もない(この辺の大体の町ではラジオが無線線備えている)と訴える村長の姿が印象的でした。水を送るポンプもなく何キロもの奥地から水を川まで汲みに来なければならぬ不便さを訴えている人もいました。ともかく我々に一気に全ての事は出来ないけれどこの学校建設がきっかけになってこの村の発展のきっかけを作ることが出来ればと思っこの村を後にしました。

田岡功パラグアイ共和国 特命全権大使の講演文



「私の講演に先立って、南北米福地開発協会がこの五年間、パラグアイのために行ってきた学校建設、また先般のアスンシオンで起きた火災のために義捐金を下さった支援に心からお礼を申し上げます。ただいま紹介がありましたように、今から約半世紀、四十七年ほど前に父親に連れられて南米パラグアイというところに行きました。私が十四歳の時でした。

父親が一番、パラグアイということに対して魅力を感じたのは出発する前に日本の政府から一区画が二十五町歩で二区画を分配されるという事を言われ、たぶん、自分が五十町歩（十五万坪）の大地主になれるということに思ったと思います。

開拓を求めて現実に着いた場所はとんでもない原始林の山の中でした。山の中には恐らくサルが何十頭、何百頭、小さい川ですがそこで米をといだら、数知れない小魚がつかみ取れるくらい、鳥といえば、群れであって、蝶といえば太陽の陽が隠れてしまうほどの蝶の山でした。開拓が始まって、その地域で辛抱できる人と辛抱できない人が二つに別れてきました。自分達みたいにその移住地に残った移住者達は開墾をしていく中で農産物は売るには十分でない、食べるにはあまる、そういう中で生活を続ける中で、日本人という誇りを持ってという事を良く父から聞かされました。戦線に参加した人達であったので大和魂、日本人として、という強い日本人意識をもった移住地が出来上がっていきました。

そういう中で自分としても四十七年過ぎてもこうして日本語も話す事が出来たという事だと思えます。入植すると同時に現地の部落に入って行った若者達はおそらく自分が話すような日本語は話す事ができず、現地語に変わってしまったという事ではないかと思えます。入植した現地のパラグアイ人達は暖かいすれてない面がいつばい残っています。地方であればその料理をお皿の中で分け合って食べる暖かい気持ちがあります。その気持ちに対して、私はパラグアイの人達に何かの形でお返ししなければいけないという気持ちを持ち、ラパスという地域を市にもいたしました。八十六年に市が成立し、大使になるまで約十八年、市長を務めていました。この間では選挙がありましてもお互いの気持ちが通ずることがあって、約八割の人が支持してくれました。自分の人徳という事で評価をされたと思えます。思い出してみますと徳島の三野で育ちました。そこでおじさんやおばさんからお世話になりましたが同じような方がパラグアイにもおられたという事です。記憶に残っていますが戦後の苦しい状態の中から隣のおばさんがサツマイモの干したものとトンモロコシを焼いたものを、二つなり三つに割って自分の子供と同じように扱ってくれた事が自分にずつつと残っております。

そうした暖かい私を支えてくれた日本での経験が助けとなり、そうした日本人の心を大切にすることでパラグアイでも私を評価してくれたのではないかと思います。私が移住した時、小学校しかなく、中学校に行っていた者が小学校に行く事はないと自分達の年代は開拓の仕事を手伝うように言われ、仕事を手伝うようになりました。恥ずかしいながら私は今言ったように中学校二年生の学歴しかもって居りません。そんな私が日本の一等国の大使になる、行って日本で何をすれば良いのかと言う気持ちでいました。

今まで自分が市長を務め、また農業の組織の長であったとしても、自分への大使としての任務に、すぐに返事が出来ませんでした。大使の責務に就くことは移住者の先輩も含めて、それは誇りとして受けるべきではないだろうか、スペイン語が十分にできないとしても、その国の代表になれるということは日本人としての誇りを持って生活したことが信頼され、ほかの国にもないことではないかと思ひなおし、もし国会の承認を得たら大使になれるとのことでしたのでその時は受ける事にしました。

野党の人でさえ、パラグアイと日本の架け橋としては日本人が最適であるとの評価をしてくれ、本会議で承認されました。本会議の実況放送を聞いた時、これは大変な事になったな、自分が日本の大使として行かなくてはいけない事になったなと初めて肩にずっしりと重荷を感じました。国会、上院、四十五名の議員の内、参席者三十八名満場一致で大使としての票を得て選ばれたということは今までのパラグアイの歴史でも数少ないことであると聞かされました。日本に来てどうやって日本とパラグアイの架け橋になるかという矢先、すでに、皆様のように私が来る前にパラグアイへの支援が実行されている事を日本に着いてはじめて知りました。皆さんが支援している地域は私がいたところから何千キロも離れており、皆さんからのご支援や、僻地の部落まで行っているということは知りませんでした。心から感謝申し上げます。

今日本に来て、徳島で育った素朴な気持ちと南米の開拓者として、日本人の魂を持って生きて来た事を、そして、改めて日本人として生まれた事に誇りを感じています。月に数回、日本の彼方此方でこうした会を催しています。出来るだけ多くの人に南米、パラグアイという国を知っていただきたいと思っています。今の時代、今の人類に求められているのは昔と違って、移住という言葉が移動ということばに変わろうとしています。今現在、日本の人で南米に移住している人が二〇〇万人、中国から世界に出ている人は六〇〇万人、インドは四〇〇〇万人の人がおります。

パラグアイにいる日本人は、はっきり数が分からないところがありますが約七五〇〇人です。隣の国のブラジルからは三五万人の人が既に移住してきています。パラグアイという国は人口が五五〇万人で土地が日本の一・一倍です。膨大な土地があります。パラグアイという国が世界から改めて見直してもらえるときが必ずくるだろうと考えています。私が皆さんに申し上げられる一つは地球上に二つの日本が在るということを知っていただきたいという事なんです。

それは日本政府が送り出した移住者の土地を合計すれば恐らく日本の国土と同じくらいになるといふことなんです。パラグアイでも日本の方で一つの県単位で土地を持つての方がいます。私たちの移住地でも大豆を作っている人の所得はもう、ヨーロッパ以上の人もいるといえます。しかし、パラグアイの人の所得は年に九百三十五ドル、日系人の大豆を作っている人は五万ドルを突破していると思います。そういう差が出ており、貧困の現状をどのようにして良くしていくか。コロンビアとかエクワドル、ペルーではゲリラが起り、問題を起こしています。同じ国民同士が殺しあっています。

まだ、パラグアイではそこまではいっておりませんが私達移住者を受け入れてくれ、自国民同様分け隔てのなく受け入れてくれた国に対して、恩返しもあると日本に来て私は日本政府に訴えています。その事が理解されてか、この度、日本政府からパラグアイへの融資、日本協力銀行からの融資も継続する事が決まりました。また、無償案件も継続する事になりました。自分としてはこの八ヶ月の大きな支援を受ける事になり、改めて日本の皆様に感謝を述べたいと思います。

一方、南米で日本人という誇りを持って歩んで来ましたが、今の日本人を見た時、私が誇りを持ってきた日本はどうなったのかとの憂いがあります。日本人は世界でも勤勉であると評価され、南米のどこに行っても日本人という言葉が出ればタクシーに乗っても受け入れてくれます。

先般、家内が経験した事ですが、電車の中で十三、四歳くらいの女の子が倒れたとのことです。眠かったのかすべったのか分かりませんが、その時、誰一人としてその女の子に大丈夫なのかと声をかける人が居なかったそうです。家内が声をかけようかと思つたとき、立ち上がったそうです。その時、周りに居た人で、「恥ずかしいいたらありやしない」と言っていたとのことで、そういう社会の冷たさが今の若者にも影響を与えているのではないかと思います。

三年ほど前に岐阜の高校で講演を頼まれました。その高校で学生数名がズボンを半分下ろしているのを見ました。しかし、私は彼らがズボンを半分下ろしているとは思わなかったのです、身体障害者の方が沢山おられるのですかねと言うと、あれは身体障害者ではないんです。なぜ、学生が尻を半分出していなくてはいけないのか、また、女の子でもないのに耳飾を、なぜ、髪を染めなければいけないのかとか何か異常な気持ちで見ていることがあります。皆様の先輩の方々が若者の現状をどういう風にしていくのかと関心があります。

私は徳島で十四年間、育つた事が私の大きな支えとなり、ふるさとの良さを感じたと思っています。其の時の経験を基に、市長をしている間、現地のお年寄りを大事にしてきたつもりです。向こうでも家庭的な問題、お年寄りを見る人達が少ない中、市としての支援、また個人的にも支援をして来しました。

その結果、その方々から手を合わされるまでになりました。南米に行く前、故郷のおばさんがちよつとこつちに来なさいと言つて麦のご飯に少し白いお米を入れて食べさせてくれました。これは私が南米に行く時代は白いご飯を食べるといふ事が余り無かつた時でしたし、出発する前に私を労わつて麦飯の中に白いご飯を入れてくれたのだと思います。四国はお通路さんの多いところで、自分の家の米櫃の中にお米が少なくなってもお通路さんが来ると必ず、お茶碗の中に麦やらお米を一杯入れました。昔の日本のよさが南米には残っていると良く聞かれます。たとえば先般、大使館の引越しの時、パラグアイから来ている日系人の若者が数名手伝いに来てくれました。十二月三〇、三十一日も、正月も休み無く働いていたそうです。

今の日本で恐らくこの東京で出稼ぎ者の若者が居なかつたとすればコンビニの二十四時間、弁当が出てこないのではないかと思います。南米からの出稼ぎ者によってコンビニの弁当は九十九%作られているそうです。

日本の若者が入つても、弁当の入つた箱を持ち上げる筋力が無い。十kgの箱を続けて持ち上げるだけの体力が無いとのことです。辛抱が出来ない若者が今日本には沢山、いるのではないかと感じています。

経済的には豊かになり、ゆとりが出来、辛抱する必要が無い環境になっています。お金が足りなければおじいさんや親から貰える。そのような生活をどこかで整理をして、変えていく事が必要な時に日本は来ているのではないかと考えます。

現状では取り返しがつかないと感じる若者はパラグアイに行き、自然とパラグアイの現実を知り、日本の良さ、経済力の良さを知るべきでないかと思つています。

また、コンビニに戻りますが私が余つたお弁当はどうするのですかというと全部、捨てますとのことです。世界で食料不足がある中で、約三分の一はおそらく捨てられているというののもつたいない話ですよ。昔はご飯の米粒一つを残してもいけないといわれてきました。豊かな経済の中、良い面と悪い面があると思つています。豊かさの中にかつての日本人の良さを保つ、調和ある社会になっていかなければと思つています。私は南米での生活で日本人としての誇りを持って来た者として、こういう席を借りて、「パラグアイと日本の架け橋」と題して話をさせていただきました。ありがとうございました。



熱心に聞き入る聴衆



ラパス市文化センター



パンタナール湿地帯



大統領官邸



マジョ村の人々が期待して待っています。



第5回国際協力ボランティア(エスペランサ中学校建設)

第6回 国際協力青年ボランティア隊募集開始

南北米福地開発協会では、日本の若き青年指導者たちが、海外における奉仕活動やグローバルな体験を通して、社会奉仕や異文化の理解を学ぶ機会が得られるよう国際協力青年ボランティアを下記のように企画致しました。

期 間 : 2005年 8月 24日 (水) ~ 9月 14日 (水)

8/ 24 : オリエンテーション・研修を行います。8/ 25成田発
後日、参加者にスケジュールの詳細を通達。

活動場所 : パラグアイ、パンタナール地域

活動内容 : インディオの村の学校建設工事手伝い、植樹活動、自然探訪、学習会、乗馬、釣り体験

参加資格 : 18歳以上 25歳までの未婚で健康に自身のある男女

参加条件 : 小論文 (400字以内) 提出

テーマ : 「参加の動機及び将来の夢」 提出期限 : 6月 30日、提出先 : 当協会事務局 (FAX・Email可)
小論文に各紹介者の推薦文を添付すること

合格発表 : 7月 5日 直接該当者に連絡致します。

募集人数 : 10名

参加費用 : 10万円

成田 アスンシオン往復航空チケット代は主催者が支援いたします。

(小遣い、海外保険、家から成田までの往復費用などは個人負担)

問い合わせ先 南北米福地開発協会事務局 担当 柴沼または飯野

TEL : 044- 829- 2821 FAX : 044- 829- 2820

Email : office@asd-nsa.jp